白川町立小・中学校再編計画　地区説明会　会議録

１．日　時　　令和４年９月２４日（土）午後７時３０分から午後８時４７分

２．会　場　　白川町町民会館

３．参加者　　別紙名簿のとおり　９名

　　町教育委員会：鈴村教育長、大岩課長、玉置学校再編専門監、鈴村

４．資料等　　別紙のとおり

５．記　録

（１）開会あいさつ　大岩課長

（２）資料説明　　鈴村教育長（19:31～19:58）

（３）質疑・意見等

〇70 代　男性Ａ

・私は今の説明で欠けている部分があると思う。それは教員の問題である。私が以前白川中学校に勤務していた時に、ある学年で数学ができない学級があった。原因を調べたところ小学４年生の時に交通事故にあったことが分かった。事故により約２ヶ月間入院をしており、それが原因で算数の学習に影響が出てしまった。その際は教員の補充が無かったので、私が放課後に算数を教えたことがあった。当時は教員の数と時間に余裕があったので、多少の対応はできたが、今は先生の余裕が全く無いので、そうした対応もできないのではないか。

今年５月の日経新聞に「七・五・三教育」という記事が出ていた。高校生の７割、中学生の５割、小学生の３割が授業が分からない、理解できていないという内容であった。日本の教育のあり方について考えなければいけないという問題提起をしていたが、教員が日々の対応に追われている中で、何かあった際の対応は難しいと思う。

また、白川町には親の離婚により子ども達が心身にダメージを受けている例が見受けられる。私の経験論でもあるが、そういう子ども達はダメージを受けたときの教育がすっぽり抜けてしまっていると思う。それを今の教員、学校の体制で補完することができるのか疑問に感じる。それができない程、今の教員は忙しいのではないかと危惧している。

反面で、教員確保が非常に難しい現状で、今のままの学校規模で将来的に継続していくのは難しいと思うので、ある程度学校を統合して教員数を減らしていくことが必要だと思っている。こうした課題に対し、町としてどう考え、対応していくかが肝心だと思う。

白川地区は子供の数が非常に少ない状況である。今後も増えないと思われるが、このままでは限界集落になってしまう。黒川地区のように移住者を受け入れる体制について、当地区の自治会長さんに打診したことがあったが、全く興味を示されなかった。新校舎は、ほとんど子どもがいない白川地区に学校を作り、他地区から通学するという体制になるが、黒川地区の移住者の多くは、中学校の統合について不安を感じている。何とか黒川地区に中学校を

残したいという思いがあり、黒川地区は何とか維持できる子供の数だと思っている。教員が不足している現実と地域の思いが矛盾していると感じている。教育長はじめ教育委員会も大変苦労していると思うが、教員の確保や学校の体制が深刻な問題だと思う。

〇鈴村教育長

・現場の状況を見ながら厳しいご意見を頂いたと思う。本町に勤められる先生方には４月の赴任式において、誰１人も見捨てない、ということをお願いしている。最近では、コロナ禍で学校に来ることができない状況が発生しているが、そういう場合は１人１台タブレットの導入により、家庭で学校同様の授業が受けられる、参加できる体制をとることで授業に遅れが無いように対応している。不登校の子どもに関しても同様にタブレット学習を進めており、また、学校には来るが授業に参加できない子どもには、別室で同様の対応をしている。

教員の体制については、県教育委員会の問題ではあるが、教員の成り手が少なく国も県も困っている。本町や他市町村でも同様の問題が発生しており、教員採用試験を受ける人数が少ないので、すぐに解決できる問題ではない。県教育委員会としては、再来年度から始まる教員の定年延長等により教員確保に努めている。町としては、小規模校を中心に非常勤職員の確保に力を入れている。新たな人材の確保や複数校の掛け持ちなど、町教育委員会として精一杯対応している。

学校数については、５小３中体制から３小１中体制を目指して進めており、白川地区、黒川地区、佐見地区に小学校はあるべきとの考えを持っている。小学生が遠距離を通学することは負担が大きく、一方で各地域に歴史や文化を持っているので、小学生のうちは地域で学び、体力がついてきたら大人数で学ぶ環境が必要だと考えている。

黒川地区で中学校を残したいという意見は把握しているが、文書による意見提出の中には、教育委員会の再編案に理解を示している意見もある。実際に黒川中学校の生徒数は当分の間、２０人規模で推移していくことになるが、内訳をみると５人という学年もあるためそれらを考慮し、中学校については令和９年４月に新校舎に統合することを提案している。色々な意見があるので、最終的には地域の合意をもって決めることになる。もし、黒川に小、中学校が残る場合、黒川小学校の校舎は築４９年を経過しており、施設の老朽化が進んでいるという課題が解決できないことになる。

白川地区も子どもの数は少ないが、新校舎が完成し、新たな教育環境が整備されることで、白川に戻ってきてくれる世帯が増えるような形にしていきたいと考えている。

〇40 代　男性Ａ

・私の店舗が白川中学校の向かいにあるが、新校舎はグラウンドのどのあたりになるのか。決まっていれば教えてほしい。

〇鈴村教育長

・現在の白川中学校の敷地は一部にイエローゾーンがかかっているためそれを避ける形で道路沿いに建設する予定としている。概ね８５％が完成した時点で、今の校舎を取り壊すこととし、新校舎と体育館をつなぐ工事を行うとともに、給食センターや町立図書館を将来的に併設する計画としている。将来的な配置については、今後のプロポ―ザル実施の際に業者から提案をしてもらうことになる。

〇玉置学校再編専門監

・近所の方は道路沿いに新校舎が建設された際に、日照問題などを心配されると思う。冬場は常に影が掛かっていると思うが、日照に関しては、夏至、冬至および春分の日、秋分の日における太陽の高さを想定し分析するソフトがあるためおおよその予測は可能である。３階建ての校舎を建設した際には、校舎よりも南東方向にある山によって先に影が生じるというデータは把握している。ただし、建物の影響による圧迫感や覗かれる感覚もあると思うので、意匠、設計上の工夫によってそうした不安感がないように進めていきたい。

〇鈴村教育長

・補足になるが、昨日がちょうど秋分の日だったので、今朝現場の日照状況について確認をしてきた。実際に確認をすると、８時頃に店舗の駐車場付近まで校舎の影が伸びている状況で、４階建ての校舎なので長い影が伸びていたし、体育館は三角屋根の形が濃飛バスの敷地付近まで掛かっていた。これが冬至になった時にどうなるかを確認したいと思っている。日照については、今後も注意するとともに圧迫感については設計段階で工夫をすることで解決していきたい。

〇60 代　男性Ａ

・２点質問をしたい。とりあえずは３小１中を目指すとの事だが、私が以前に聞いていたのは、義務教育学校を目指すというもので、その独自性を本町の教育プログラムに導入していただきたいと思っていた。是非３小１中の段階からそうした取り組みを行っていただきたいと思う。また、本町は非常に広い地域であり、統合後の白川中学校の佐見地区の通学バス運行に関しては、保護者からも感謝の声を多く聞いている。道路事情を含め本町のアクセス環境は恵まれていないので、ＩＣＴの普及をもっと積極的に進めてほしい。それにより３小１中であってもどこの学校でも同じ教育が受けられるような環境整備をお願いしたい。

　令和５年度から開始予定の部活動の地域移行に関しては、スポーツ庁が考える理想形はあると思うが、本町でスポーツができる環境を残してほしい。コロナにより子どもの体力低下が懸念されている中で、更に部活動ができなくなると中学生の体力低下も心配をすると

ころである。現実の問題として白川中学校では部活動に所属しないという選択肢も出来ていることから、多人数でスポーツができる仕組みを研究し、白川モデルのスポーツ環境を検討してほしい。

〇鈴村教育長

・まずは３小１中の学校配置とし、やがて時機を視ながら義務教育学校に切り替えるという方針は持っている。義務教育学校の白川モデルは注目されると思うが、理解をいただくことにも時間を要すると感じているので、粘り強く進めていきたい。通学バスにおいて、自然災害等の発生の可能性がある場合に関しては、佐見地区の生徒に関しては、佐見地区での保護者引き渡しを訓練として実施している。以前の白川中校区については、それぞれ学校での引き渡しとなる。

佐見中学校との統合により校区が非常に広くなったので、佐見地区については通学環境に配慮してきたが、黒川中学校も統合することになれば同様に行う必要があるし、拠点を複数整備することも考えられる。部活動の佐見スポリンバスについてもご理解をいただいているが、まずはこれからの部活動の体制を考えることを優先すべきと考えている。ご意見があったように子どもの体力は落ちているのは事実だと思うので、こうした対応も含めて学校再編と併せて検討していく必要があると感じている。

ＩＣＴの活用に関しては、佐見小学校で等身大が投影可能なプロジェクターを導入し、他校との合同授業を行うなど、特色ある取り組みを進めていきたい。

〇玉置学校再編専門監

・佐見小学校については、来年の新入生が１人のため、国語や算数の授業については、大型モニターを使用し、他校との合同授業が行えるような計画をしてみえる。災害等有事の際ではなく、少人数教育に対応すべくＩＣＴを活用した取り組みについて先生方も工夫してみえるので、皆さんにもご承知おきいただきたい。

〇70 代　男性Ａ

・色々な意見があったが、部活動をやりたい子どもは白川には残らない。これが現実である。部活動を一生懸命やろうとすると、白川より美濃加茂の方が環境的に恵まれている。

私は、新規採用の時に中学校で部活動指導を経験したが、朝７時から８時までの１時間と夕方３時半から７時までを部活動の指導として３年間勤務した。白川の場合はスクールバスがあるので時間的な制限がある。

もう一つ、小学校と中学校の違いは何かと言うと、小学校の頃にあったことは忘れるが中学校の頃の出来事は忘れないという点であり、それはホルモンが原因した記憶力の問題で

ある。私が心配なのは中学校で統合した場合、その子たちに故郷の記憶は残るのかという点である。

〇鈴村教育長

・部活動に関して、ご意見のとおり本町の場合は、バス通学のため時間的な制約はある。過去には、指導者や保護者が主体となった部活動の時間が別で設けられ、その後スポルトクラブ、スポーツリンクの活動という流れで現在に至っているが、子どもが部活に打ち込めるよう体制を工夫しながら進めきた経緯がある。

　そういった取り組みがあるなかで、国は休日の部活動について地域移行を進める提言をしている。悪い事ではないと思うが、本町としては子供を含めたスポーツができる環境をどうすべきか、町全体のスポーツ振興を考える必要があると感じている。スポーツで高校へ進学する子もいるので、全員が帰ってこないとは言い切れないと思うが、子ども達には、自分がやりたいことをやれるようにしてあげることが大人の役割だと思っている。

　小・中学校の件については、義務教育学校の構想には４年生までを地元、５年生からは大人数で学ぶというスタイルも考えているが、現時点ではそこまで踏み込んだ説明はしていない。義務教育学校という一つの学校になれば、先ほどのテレビ会議システムによる授業について、白川でやっている授業を黒川や佐見で同様に授業を受けることも可能となる。これを別々の学校でやっているとどうしても学校間のセクトが生じてしまうので、そこを切り替えるためにも一つの学校にすることが義務教育学校の発想である。深く考慮した上でのモデルであり、遠い先にこの目標を置きつつ、まずは３小１中体制についてご理解いただくとともに、今後のスポーツの在り方に関しては、中学校の部活動を契機に町全体のスポーツ振興を考えることを前提に進めてきたいと考える。

〇60 代　男性Ａ

・働く世代が多くなったので、学校と地域の連携としてコミュニティスクールの役割が重要だと考える。教員の負担軽減を図るためにも完全な地域移行を目指すのであれば、学校が終わった子ども達がその拠点で勉強やスポーツをするなど親の世代が安心して働きに出られる仕組みを作ることが必要だと思う。

〇鈴村教育長

・新しい校舎建設においては、物理的にそういった部屋を考えていきたい。

　現在でも白川中学校は放課後学習室としての地域未来塾の運営を地域にお願いしている。今後、町全体のスポーツ環境を考えたときに、白川中学校の地域未来塾は充実していく必要があると感じている。

また、旧佐見中学校を小学校に改修したが、校舎１階の元美術室を放課後子ども教室としてスクールバスが出るまでの間、地域の方々にお願いし、子ども達が過ごせる教室を設けている。学校にそうした部屋を設置したのは佐見小学校が初めてであり、これからの対応として必要な事だと認識している。

〇鈴村教育長

・今日はお忙しい中ご参加いただいた。２週間後にも同様の説明会を開催するので、多くのご参加をお願いしたい。各地区で説明会を開催しているが、保護者の参加は少ないので、２学期以降の学校行事等にお邪魔して、本日のような話しをする機会を設けていきたいと考えている。

（４）閉会あいさつ　大岩課長　（２０：４７閉会）